

読書通信

第3号
発行人: amagata



詩を比較する

高村光太郎「レモン哀歌」と宮沢賢治「永訣の朝」

高村光太郎「レモン哀歌」と宮沢賢治「永訣の朝」は共に高校の教科書に載るほど有名な作品です。そして、どちらも近親者の死に際し、詠まれた詩です。元来、詩は作者の心が揺れ動かされたときに生まれるものですから、近親者の死は詩が生まれやすいテーマといえるでしょう。けれども、二人の詩は同じテーマを扱っているが、異なった印象を受けます。妻の死と妹の死という違い以上にそれは感じられます。

レモン哀歌

高村光太郎

そんなにもあなたはレモンを待つてゐたかなしく白くあかるい死の床で
わたしの手からとつた一つのレモンを
あなたのきれいな歯ががりりと噛んだ
トパアズいろの香気が立つ
その数滴の天のものなるレモンの汁は
ぱつとあなたの意識を正常にした
あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑ふ
わたしの手を握るあなたの力の健康さよ
あなたの咽喉に嵐はあるが
かういふ命の瀬戸ぎはに
智恵子は何と智恵子となり
生涯の愛を一瞬にかたむけた
それからひと時
昔山巔でしたやうな深呼吸を一つして

あなたの機関はそれなり止まつた
写真の前に挿した桜の花かげに
すずしく光るレモンを今日も置かう

永訣の朝

宮沢賢治

けふのうちに
とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ
(あめゆじゆとてちてけんじや)
うすあかくいつさう陰惨な雲から
みぞれはびちよびちよふつてくる
(あめゆじゆとてちてけんじや)
青い萼菜のもやうのついた
これらふたつのかけた陶碗に
おまへがたべるあめゆきをとりうとして
わたくしはまがつたてつばうだまのやうに
このくらいみぞれのなかに飛びだした
(あめゆじゆとてちてけんじや)
蒼鉛いろの暗い雲から
みぞれはびちよびちよ沈んでくる
ああとし子
死ぬといふいまごろになつて
わたくしをいつしやうあかるくするため
こんなさつぱりした雪のひとわんを
おまへはわたくしにたのんだのだ
ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
わたくしもまつすぐにすすんでいくから
(あめゆじゆとてちてけんじや)

はげしいはげしい熱やあへぎのあひだから
おまへはわたくしにたのんだのだ
銀河や太陽 気圏などとよばれたせかいの
それからおちた雪のさいごのひとわんを……
ふたぎれのみかけせきさいに
みぞれはさびしくたまつてゐる
わたくしはそのうへにあぶなくたち
雪と水とのまつしるな二相系をたもち
すきとほるつめたい雫にみちた
このつややかな松のえだから
わたくしのやさしいもうとよ
さいごのたべものをもらつていかう
わたしたちがいつしよにぞだつてきたあひだ
みなれたちやわんのこの藍のもやうにも
もうけふおまへはわかれてしまふ
(Ora Orde Shiori seguno)

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ
あああのとざされた病室の
くらいびやうぶやかのなかに
やさしくあをじろく燃えてゐる
わたくしのけなげないもうとよ
この雪はどこをえらばうにも
あんまりどこもまつしるなのだ
あんなおそろしいみだれたそれから
このうつくしい雪がきたのだ
(うまれでくるたて
こんどはこたにわりやのごとばかりで
くるしまなあよにうまれてくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに
わたくしはいまころからいのる
どうかこれが兜率の天の食にやつて
やがてはおまへとみんなとに
聖い資糧をもたらすことを
わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

光太郎の「レモン哀歌」では、最愛の妻智恵子が亡くなったにもかかわらず、「すずしく光るレモンを今日も置かう」といかにもすずしげで、あまり悲しみが感じられません。それどころか、詩全体にレモンの爽やかさまで感じられます。確かに、天の恵みであるレモンのおかげで智恵子の意識は回復しました。それでもやはり、さっぱりしすぎです。

一方、賢治の「永訣の朝」では、発熱のため苦しんでいる妹とし子の「雨雪を取つてきて」の願いを叶えようと、「まがつたてつばうだまのやうに」あたふたと急いでいる様子がうかがえます。そして、妹のその願いは熱ある自分の身体を冷やすためだけのものではなく、賢治にみんなの幸せを願うきっかけを与えるものとなったのです。暗雲の中から一筋の光明が降り注ぐイメージです。妹の言葉(方言)が実に巧みに配置されています。その言葉を通して、賢治の意識が個から全体へと、自分から他人へと昇華されていく過程が如実に表現されています。

高村光太郎の「レモン哀歌」は詩集『智恵子抄』に、宮沢賢治の「永訣の朝」は詩集『春と修羅』に収録されています。



後記

昨年は年末ぎりぎりまで目標の五〇冊読了を達成することができました。これで三年連続五〇冊以上読了したことになります。今年は冊数にこだわらず、何か大作を読もうと思っています。恥ずかしながら、まだ読んだことがなかったのが、現在、紫式部著・與謝野晶子訳「源氏物語」(角川文庫・全五冊)を読んでいる最中です。